

## 職員リレーエッセイ

## 私の日常は . . .

生活支援員兼調理員 笠原康代

2019年11月7日 午前2時30分の電話。

家族の中で「119事件」と言われている出来事です。

田舎の平屋住宅。娘たちは江戸城と言っていた作りに（襖や戸で部屋を仕切っている）母は一人で生活していました。父が亡くなって4年が経った頃、デイサービスへは通っていましたが、帰宅しても会話する人もなく広い家にポツンと。

掛かりつけのクリニックに行く途中、いつもの道なのに分からなくなり1時間程歩き続け、運よく見たことのある通りに出ることが出来て帰宅。予約時間になっても来院しないとクリニックから連絡があり弟が探しに行きました。

毎日のように幻覚、幻聴、幻視を見ては家族が心配していた頃の . . .

11月7日午前1時 「デイサービスに行っている〇〇さんがトイレに落ちたから助けに来てほしい」と119へ通報。

消防の方は、「受け答えもはっきりしていて名前も住所も答えていたので出勤しました」と。警察、救急車、消防車、レスキューと9台もの緊急車両を呼んでしまいました。午前2時30分弟からの電話。「もう無理だよ」疲労、悲しみ、不安、やり場のない怒り。「そうか . . . 大変だったね 色々ありがとう」それから半年後、認知症の母は私の家に来ました。

来るまでの間、生活がし易くなるにはどうしたらいいのか日々考え、家中のレイアウトを少しずつ変えて1年は頑張ろう。そんな私の決意は一瞬で吹き飛びました。

「どうしたらこうなるの?」「私も分からん」こんな会話が毎日。気持ちの浮き沈みも激しく、懐中電灯を持って深夜の自宅警備（徘徊）。帰宅すると煮物が一品出来ていたり。次の日は、部屋からの尿臭。私にとって毎日が新しい一日。

行き詰まるとケアマネに電話をしてはアドバイスを受け、デイサービスの職員さんにその事を相談しお願いします。

先日の眼科受診の折、診察後に呼び止められ「様子はどうかな?こんな状態になったら直ぐに受診して、心配になってね」と聞いて下さいます。

神経内科の先生は母のお気に入り「カッコいい先生だね」と言います。パーキンソン症で手の震えも酷いのですが順番が来ると震えが収まってきます。

こんな日々の出来事を職場の人達は聞いてくれます。時には共感してくれ、時には励ましてくれます。感謝です。

母との介護の日々は続きますが、こうして大勢の方々のおかげ様で毎日を過ごすことが出来て幸せです。レビー小体型認知症は発症して10年と言われます。

私は母に親孝行の一つも出来ているのでしょうか。

次は生活支援員の西口 あゆみさんに繋がります